

平成 30 年 1 月 27 日(土)に東京海洋大学で開催された全国フォーラムと翌 28 日(日)の帆船「みらいへ」による横浜港体験学習の速報レポートです。詳細は、後日 CNAC の HP にアップされます。

NPO 法人「海に学ぶ体験学習協議会(CNAC)」の第 12 回全国フォーラムが「プロフェッショナルとしての自然体験活動～新たな潮流を探る～」をテーマに約 50 名の参加を得て東京都港区の東京海洋大学品川キャンパスで開催されました。今回のフォーラムは、基調講演、活動事例報告の後、従来はこれらを踏まえたパネルディスカッションを行っていましたが、今回は報告者ごとの三つのテーマに分かれてグループディスカッションを行うことにしました。自然体験活動をベースにした起業や就職の問題を取り上げており、若い年代や女性の方の参加が多く、例年とは異なる雰囲気でした。

【主催者、来賓挨拶】

フォーラム冒頭、三好 利和 CNAC 代表理事からは、「CNAC は発足以来、海辺の体験活動の普及を第一のミッションとして活動してきました。まず、初めに海辺の活動を安全なものにするために、『親子海あそび安全講座』などの資料の作成、配布を行い、次には海に近づいてもらうために、30 海辺の活動事例を集めた『海あそびレシピ』を作成しました。



昨日、国立公園区域の三陸山田町オランダ島から戻ってきました。ここでは、震災からの復興プロジェクトとして、島の体験活動プログラム

を取り上げ、進めていこうとしています。また、他の国立公園でも保全するだけでなく、多くの人々に利用してもらおうという動きが進んでいます。CNAC は、これらの動きと連携するとともに海洋教育推進など先頭に立って実施していきたい。本日のフォーラムテーマには、「新たな潮流」というフレーズがあり、現状を認識し次世代へつなげていく思いを込めています」という主催者挨拶がありました。

続いて、国土交通省港湾局 中崎 剛 海洋・環境課長からは「当課の仕事として、地球環境問題が大きな課題であります。海は世界の 7 割を占めており、環境に果たす役割が大きい。CO2 の吸収、ブルーカーボンが進められるなか、藻場、干潟の重要性が高まっています。漁業者の方から、海はきれいだが豊かでない、魚が獲れないという話を伺います。

海的环境は多くの産業にかかわっており、環境教育の取り組みが重要だと思います。幼児期から小学校までに体験活動を経験した子どもの能力が

高いという報告があります、本日の CNAC 全国フォーラムのテーマは、子どもから就職まで取り上げた幅広いテーマです。今後とも、CNAC の皆様のご活躍を期待したい」との来賓挨拶がありました。

引き続き、一般財団法人みなと総合研究財団の山縣 宜彦副理事長から「みなと総合研究財団(WAVE)」が誕生して 30 周年です。活動の柱として①港・海洋の調査研究②これらの活動主体への支援③啓蒙を実施してきました。これらの関係で CNAC の事務局を務めています。



今年のフォーラムは、指導者育成が重要なテーマだと認識しています。また、自然体験活動を新たなビジネス、地域おこしとしてとらえる動きもあり、さらなる展開が期待されています。CNAC が作成した『海あそびレシピ』は力作で、活動の全国展開を応援していきます。寒い日ですが熱い議論を」とのご挨拶をいただきました。

【全国フォーラム基調講演】

大塚 英治様（株式会社沿海調査エンジニアリング 代表取締役社長）に、基調講演「地域づくりと海辺の自然体験活動の実践例」を行っていただきました。基調講演では、ご自身のプロフィール紹介「現在 48 歳、その間 40 数年海とかかわりを持つ」から始まり、北海道、泊村など地域ならではの起業例を紹介していただきました。



すべての事業は「ドリルを売るなら穴を売れ」が基本。専門化するとドリルを売りたいくなるが、目的は穴をあけること。いつしか目的と手段のずれが生じることが多い。会社のゴール、スローガンとして「海を使って人々を豊かにする」を掲げている。

異分野の組み合わせが成長分野になる。とまり村は、電源立地以来、漁業衰退、人口減等多くの課題に直面。これに対処するため、田舎ビジネスでできる範囲(自己資本 800 万円)、経産省をはじめとする田舎ならではの手厚い支援を得て、築 95 年の古民家を改装してさかずきテラスを開業し、地域と会社のリソースを活用し、地域を元気にしたい。平成 28 年度延客数 520 人、売上高 600 万人は 5 年後、3,000 人、3,000 万円、利益高 1,500 万円を目指す。

その間、さかずきテラスを創発の場として活用、新たなブランド『ゆきいも』を創出したり、地方創生事業 地域商社 株式会社キットブルーを立ち上げ、様々な事業への取り組みを紹介されました。

当日、大塚様は、現地で養殖されたウニを持参していただきました。積丹の雲丹は 5 月から 8 月が漁期ですが、9 月上旬から昆布餌を与えることにより、再び 10 月から身が入るとのことで、やや小ぶりですが、交流会でおいしくいただきました。

【活動事例報告】



事例 1 件目、大日方 冬樹様（おたり自然学校 校長）からは、「地域おこし協力隊の経験を自然学校起業へ」として、ご自身の経験を踏まえて最前線の話をしていただきました。

平成 22 年から 3 年間、南房総市大房岬自然の家のスタッフとして務めたのち、小谷村の地域おこし協力隊に採用され、嘱託職員として勤務。当初は観光担当で電話番が多く、自分のやりたいことができず、上司との衝突を経て企画担当に。二年目から『おたり自然学校』の活動開始、平成 29 年 4 月に独立、起業。

事業としては、地の利を生かした自然体験ツアーなどの自主事業と、くらし体験や婚活がらみの受託事業があり、その比率は 4 : 6。地域の要望を踏まえた事業が多くなっている。

最後に、おたり自然学校が目指すものとして、「人口 3,000 人の小さな村から、誰もが心豊かに暮らせる地域づくりに貢献。これを全国のサンプルに！」と夢を語る校長の顔が印象的でした。

事例 2 件目、川端 潮音氏（海辺の環境フォーラム 2017 共同実行委員長）からは、「若い情熱を海辺の未来へ～2017

海辺の環境教育フォーラムの実践から～」として、海辺の環境フォーラム 2017in 南房総の共同実行委員長として実感されたことを話されました。

子どもへの自然体験活動は、しっかり見守ることで子どもが成長。大人同士の自然体験活動では、大人が本気で海あそび、自然の中で遊ぶことが重要で広がりが出てくる。

2017年の環境フォーラム実施時には、UNDER25(25歳以下)を巻き込むことに腐心。その人の得意技を生かし、とにかく楽しむ。自身からエネルギーが出ていないと他人を巻き込めない。伝えていくことが大事。10人が20人、20人が40人・・・9回伝えると世界中に広がるとのことでした。

ご自身が若いのに周りを巻き込んでいくパワーに敬服しました。



事例3件目、前田 英雅氏（東京コミュニケーションアート専門学校 副校長）からは、若者が目指す海洋系の就職先」として、若者を送り出す立場として、ご自身の専門学校の海洋系の就職事情について紹介していただいた。最近2



年、学生の就職を担当。海に関わる仕事は、ダイビングインストラクターやネイチャーガイド以外に水族館関係、観賞魚関係があり、これらへの就職が多い。共通して求められる人材は、人柄、接客、企画力、発信力に優れていることで、当校もそれに力を入れている。

採用試験の種類はいろいろあるが、書類選考と面接は必須である。就職前の現場経験が重要で、学生にはインターンシップを行うよう指導している。海洋・生き物にかかわる仕事は、今まで以上に必要とされる分野で優秀な人

材確保のためには産学連携が必要とのことでした。

報告を通じて、学生を見守る教育者として、厳しいながらも優しい一面を見た気がしました。

続いて、基調講演、活動報告に関する質疑応答に入りました。

川端氏への質問：持続可能な社会を作るためには、異分野との融合が重要。大人とのかかわりについてのコツは？
(川端氏) 作戦を立てます。気になる人、面白そうな人については、事前に徹底的に調べます。

大塚氏への質問：事業展開する中、多様な産業をつなげる思いは？

(大塚氏) 儲けるだけではない、一緒にできるかが重要。そのためは、人を知る、同じ方向なのか？課題共有？ピュアコンピタンスとして「海に」をキーワード。これが共通ならフォローしやすい。

【グループディスカッション】

しばしの休憩の後、A. 田舎で起業、 B. 海辺の環境教育の未来を語ろう、 C. 海洋系学生が目指す就職先の3つのグループに分かれてグループディスカッションを1時間ほど行いました。

私は就職事情に関心があったのでグループCに加わりました。CNAC理事である東京海洋大学の千足 耕一教授をコーディネーターとして、東京コミュニケーションアート専門学校の1年生5名とおじさん世代5名で議論をはじめました。



親と子、もしくはそれ以上の年の差があり、ジェネレーションギャップの話題から始まり、就職に対する考え方、できるだけ同じところで長く頑張るのか、ステップアップのため転職するのかなどが議論になり、やめるにしてもある程度一生懸命やらないと何も残らないなど議論は尽きませんでした。好きな仕事をしたいという若い人の情熱を感じるとともに、自然体験活動分野の情報が少ないと指摘には耳を傾けなければいけないと感じました。

【グループディスカッションまとめ】

各グループ 5 分程度で代表者が議論総括報告。

A グループ「田舎で起業」

成功(700 倍成長)したのは、1. 内需(地域)…コミュニティとして認められる。
2. 外需(地域外)…ハードルの低いアクティビティ(かまくらづくり)を取り上げ。
両者に対応してきたから。また、これらがラップする部分について、自然のめぐみ食堂やふるさと納税など集う場を創出したことも成功の大きな要素

B グループ「海辺の環境教育の未来を語ろう」

参加者が多くてキーワードの列挙にとどまる。未来に必要なものは、世代間コミュニケーションが重要、情に訴える、感動情熱が必要、その原点は海が好き、楽しそうという身近な気持ち。

何も変わらないのではなく、大事なものを伝えて変えていくことが重要。

C グループ「海洋系学生が目指す就職先」

仕事のとらえ方は、いろいろあるが選んだものについてはあるレベルまで一生懸命やるのが重要。海洋系の仕事は、季節アルバイト的なものからフル雇用まで各種あるが、学生がこうした情報に触れることは少なく、自然体験学習の情報は不足している。だからこそ、インターンシップが重要。



【閉会挨拶】

最後に、フォーラムの閉会にあたり、神保 清司 CNAC 副代表理事から基調講演の大塚氏、活動報告の大日方氏、川端氏、前田氏に対する謝辞の後、「美しい海と人の活動をつなげていくためには、人材を育てる必要があり、しくみを考えていかなければならない。CNAC として、今後取り組んでいきますので、引き続きのご支援をお願いしたい。会員に入会いただけるとさらにうれしい」との挨拶の後、参加者全員で CNAC の旗を囲んで記念写真を撮り、参加者はそれぞれ多くの気付きを得て、今年の全国フォーラムは幕を閉じました。



【交流会】

その後、東京海洋大学の学生食堂で、議論を深めたい人、飲みたい人、ウニを食べたい人など約 30 名の参加を得て交流会が開催されました。たくさんの料理、お酒が並べられ、あっという間に予定の時間が来ていつもの中島 正雄 CNAC 事務局長の中締めで、交流会はお開きとなりました。

【帆船「みらいへ」による横浜港体験学習】

翌日の1月28日(日)は、帆船「みらいへ」による横浜港体験学習が開催されました。当日は、底冷えのする寒い日でしたが、風もなく帆船クルーズを楽しみました。親子連れの姿も見られ、防寒に身を固めた30名の皆様が参加されました。

<乗船・出航> 横浜みなとみらいのぶかり桟橋に9:00に集合し、点呼、チェックをした後、帆船みらいへに乗船です。CNACの会員でもある(一社)グローバル人材育成推進機構の小原さんのMCで乗組員紹介がありました。船員さんたちはお互いをニックネームで呼び合い。我々にもニックネームで呼んでくださいと言われ距離がうんと短くなった気がしました。

船は、9:35に出航しました。ベイブリッジまでは、エンジン走行し、通過した後、帆走する予定だそうです。海からの街並みや港の施設を楽しみ、やがて船はベイブリッジの下に差しかかりました。普段見ることができない光景に皆さん歓声を上げていました。



船が外に出たところを見計らって、最初の体験「セイル展帆」です。みらいへには、13枚のセイル(帆)がありますが、今日はバウデッキに2枚、後ろに1枚合計3枚張ります。「ツーシックスヒープ！(2-6 Heave)」の掛け声で力を合わせてロープを引きます。

セイルを張り終えた後は、3班に分かれて班別対抗船上運動会です。種目は、①デッキを磨くのに使うヤシの実ブラシリレー、②ワニのいる地帯を3つの軽石を足場に使って渡るよろよろ危ないリレー、③運動会の定番綱引きです。寒さを吹き飛ばすくらい盛り上がり、特に滑車を使った綱引きは大接戦でした。

<昼食> 運動会の成績順位ごとに昼食をメスルーム(食堂)で取りました。かなりの辛口カレーを主としたもので、キャベツ、トマト、唐揚げ、バナナ、牛乳があり、とてもおいしかったです。アルミ製の食器がずしりと重かったです。

<体験活動> 昼食後、一休みした後、先ほどの班別で体験活動です。体験は30分刻みで①デッキでの操船体験・海図学習、②バウスプリット体験、③ロープワーク体験です。①は難しくありませんでしたが、②は安全帯を付けロープの上を歩く。下は大海原。かなりの恐怖です。③は一転細かい作業。不器用な私はなかなかうまくできず、お土産の紐飾りもうまくできませんでした。



<帰港> そうこうしているうちに船は帰港に入り、ベイブリッジの下でバウデッキに全員集まり、記念写真の撮影です。15:40 着岸。あっという間の6時間のクルーズを終えて、皆様名残惜しそうでした。

最後に小原さんから、「みらいへは、全国各地蒲郡、名古屋等で体験乗船を実施。長期のものもあり、またのご利用を」との挨拶があり、解散となり、背筋の痛みを感じながら帰路につきました。みらいへの乗組員の皆様、大変お世話になりました。

<おまけ> 解散後、さらに元気な10数名は18mの高さのデッキのぼりに挑戦したそうです。



【担当理事としての感想】

今回、従来のフォーラムと趣向を変え、これからの海辺の体験活動を担う若い人を対象として企画。多くの若い人の参加を得てある程度は成功かなと思います。ディスカッションの中で、体験学習に関する情報は不足しているとの指摘もあり、今後のCNACの活動に取り組んでいきたいと思います。

また、帆船みらいへによるクルーズは、(一社)グローバル人材育成推進機構様のご厚意により、横浜港に寄港していた船を安価で利用させていただいたものです。心から感謝いたします。また、今回のフォーラム開催に当たり、基調講演や活動報告をしていただいた皆様、会場を提供していただいた東京海洋大学の皆様、国土交通省をはじめとする関係者の皆様に深く感謝いたします。

(文責 森川 雅行、写真 港 絢子)

